

屋久島のエビス神信仰

田 中 宣 一

一、はじめに

エビス神⁽¹⁾の信仰はわが国に広く分布し、農・山・漁村の人々、都市部の商人など、いろいろな生業の人々によって支持されている。エビス神の性格についての理解の仕方は、それら支持する人々の生業や地域の別によって必ずしも一様ではなく、信仰内容は総じて複雑である。

エビスの語義は未開の異俗の人々というようなものであるから、神名としては一風変わったものと言えよう。その出現がいつのころなのか確たることは明らかでないが、すでに平安時代末期にはエビ

ス神を祀る広田神社の西宮夷社の信仰は相当盛んであり、それ以後鎌倉時代にかけて、石清水八幡宮や東大寺、竜田神社、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮等々、各地の社寺にエビス神は勧請されていたようである。⁽²⁾しかしこの信仰がさらに広まるのは、もともと西宮において並祀されることが多く関係の深かったエビスと三郎殿という二神の性格が混融⁽³⁾し、烏帽子姿で鯛を抱いたエビス神のイメージが室町時代の福神信仰の高まりの中で歓迎されたからである。

漂着神的要素の強い三郎殿の性格を取り込みながら、エビス神は早くから漁業航海の神として漁師や海運に携わる人々の間に信仰されていたが、⁽⁴⁾福神の仲間入りをするに及んで、室町時代以降都市部の商人の間に広まっていき、干鯛商人、漆商人、その他同業者ごとにエビス講を結成する風が生じたりした。⁽⁵⁾現在においても商家では、エビス講の日にはエビス像を拝み、その前に有り金を拵などに入れて供し、相集まって売り買いの真似を縁起よく行なうことがあるし、エビスに因んだ大売り出しも行なわれている。一方、農村部へのエビス神信仰の伝播はそれよりもやや遅れてはいたが、江戸時代中期以降、田の神・亥の子神等と結合するような形で、あるいはそれら諸神の地位を襲うようにして次第に受容されていった。そこでのエビス神は、豊作を約束してくれる福神的イメージとともに、特に東日本においては不具神としての性格の顕著なことが特徴といえる。これについてはすでに小稿も成したことがある。⁽⁶⁾

二、本稿の目的

エビス神に取り込まれたかにみえる三郎殿の性格が漂着神的性格の濃いものであったからであろうか、エビス神の信仰が最初は漁業者・航海者を中心になされていたことはすでに述べた通りであるが、また現在においても、漁村部におけるエビス神の信仰は盛んなものがある。その研究にも桜田勝徳氏⁽⁷⁾、亀山慶一氏⁽⁸⁾、宮本常一氏⁽⁹⁾、川崎晃稔氏⁽¹⁰⁾、波平恵美子氏等々⁽¹¹⁾のものがあつては枚挙にいとまがないほどである。

屋久島のエビス神については、宮本常一氏の『屋久島民俗誌』や地元の雑誌『南島民俗』『鹿児島民俗』等に若干の事例報告をみるのみだが、九州南部に範囲を広げてみると、先の桜田氏や川崎氏のように神体を中心とした研究にその特色をみることができると、漁の開始にあたつて、選ばれた漁夫が手拭で目隠しをして海中に潜つて石を拾ひあげ、それをエビス神のご神体として漁の期間中祀りつづける鹿児島県甕島などの例をあげ、南九州から西北九州に点々と分布している同様の例と比較しながら、かつてこのような漁業儀礼を持つ漁撈生活集団が広く活躍していたことを予想した業績や、種子島全域にわたる漁村のエビス神のご神体を詳細に調査し分類したもの⁽¹²⁾のなどである。

さて本稿の目的は、従来研究上空白であつた屋久島内のエビス神信仰の実態を述べ、周辺地域の例

や従来の研究成果と比較しながら、同島のエビス神信仰の特徴を考えてみるのである。

三、屋久島概観

屋久島は、鹿児島湾口より南方約七〇キロメートルの所にある面積約五〇〇平方キロメートルのほぼ円形の島で、島の周囲は一〇〇キロメートル余である。九州地方の最高峰宮之浦岳（一、九三五メートル）を中心に、一〇〇〇メートル以上の山が重疊し、温暖な気温と多量の降水とによって、屋久杉をはじめ樹木の繁茂が著しい。島のほとんどは山岳部で、耕地は外縁部にのみあり、集落もまたそこにしかない。

人の住みついたのは古く、すでに縄文時代の遺跡も数多くみられるというが、歴史の表面に出てくるのは推古天皇二十四年の時で、『日本書紀』に「三月、擁久人三口帰化、夏五月、夜勾人七口来之。秋七月、亦擁玖廿口来之。云々」とあり、屋久島の人が何らかの理由で、続けて中央へ出て行ったことがわかる。その後史書にしばしば登場し、特に中世以降は屋久杉が島外の人々の注目の的になって、薩摩の島津氏により森林統制を受けたりしている。

十五世紀末に、日増上人という日蓮宗の僧侶が種子島への布教後屋久島に渡り、寺院を建て教えを広めるに及んで島内は日蓮宗一色に塗りつぶされたという。⁽¹⁵⁾しかし明治以降浄土真宗が伝えられ、現

屋久島のエビス神信仰

第1表 部落別世帯数

町名	部落名	世帯数
上屋久	口永良部	110
	*永田	287
	*吉田	137
	*一湊	544
	*志戸子	182
	*宮之浦	1187
	*楠川	167
	*榑川	60
	*小瀬田	155
	長峰谷	90
	白	1
合 計		2920
屋久	永久保	47
	*船行	90
	*松峰	58
	*安房	585
	*春牧	295
	平野	115
	*高平	29
	*麦生	75
	*原	152
	*尾之	239
	*小平	49
	*湯泊	190
	旭	96
	*中	127
	*栗生	312
合 計		2459

上屋久町は昭和55年10月1日現在、屋久町は昭和54年7月1日現在、民調査より。

在島の宗旨別寺院数は日蓮宗八カ寺、浄土真宗五カ寺、その他一カ寺とな⁽¹⁶⁾っている。神社は各部落に中心となるものが一社あるが、神官は宮之浦の益教神社と原の益教神社に一人ずつ居られるだけであり、宮之浦の吉元氏が上屋久町の、原の有川氏が屋久町の各社の公式行事に関与している。

明治以前の統計書がないので確たることはわからないが、食糧生産の中心は甘藷で、これを主食として生活していたらしい。もちろん米麦もとれたが十分ではなかったという。林業も重要な産業ではあったが、全部落が海に面しているので、良港の有無と漁獲量の差はあっても漁業に依存する度合いも大きかった。太平洋戦争後は甘藷やボンカンの栽培も本格的に行なわれ、公共事業等も増えたためそこに雇用される人も多くなり、人々の生産は安定しているかに見える。

屋久島は鹿児島県熊毛郡に属し、行政上は上屋久町と屋久町とに分かれている（上屋久町には隣島の口永良部も含まれる）。各部落ごとの世帯数は第1表の通りであるが、この中には太平洋戦争後に開拓

して新たに住み始めた所もあるので、本稿においてはそれ以前からある*印をつけた所のみのエビス神信仰について考えることにしたい。

四、屋久島の漁業習俗の概略

屋久島の代表的な漁業集落は、一湊と栗生である。それ以外では現在、志戸子、宮之浦、楠川、安房、原などが比較的盛んであるというにすぎない。しかしこれは動力船が主力になって以来のことであって、戦後しばらくまでの無動力船の多い時代には人手を必要としたので、全部落の男たちは何らかの形で漁業に従事していた。その頃は、古くは鰹漁、つづいて飛び魚漁が主体で、一湊のように鯖漁に精を出す所もあった。各部落のエビス神信仰について考える場合、鰹漁と飛び魚漁に関することが多いので、以下少し述べてみたい。

(一) 鰹漁

大正時代初期まではほとんど全部の部落に鰹船が何隻もあり、部落の成年男子は乗り子としてどの船かに雇われる形で、漁に関係していたのである。例えば第2表によると、単純計算をしても、吉田では鰹船一隻につき男子が四十三人、一湊でも約四十三人、永田では約三十九人となる。これは老若

第2表 明治14年部落別戸数・人口と鯉船所有数

部落名	戸数と船		人口		鯉船数
	戸	数	人	口	
吉田	30	戸	男女	86人 106	2隻
一湊	166		男女	470 498	11
永田	190		男女	503 514	13

上屋久町編刊『上屋久町産業の展開構造』(昭38)より。

をひっくり返す数であるので、一隻当りの実際に働ける男子数はずっと少なくなる。鯉船の船中には十五歳以上の男子が二十五、六名位必要だったというから、かつては部落中の働ける男たちがほとんどすべて鯉船に乗っていたと考えても考え過ぎではなからう。鯉漁が屋久島の生業ひいては日常生活に占める重さが理解できようかと思う。

鯉の漁期は四月から十二月頃までで、日和がよければ毎日でも出漁したという。朝まだ暗いうちから出漁し、まず餌にするキビナゴ(ザコと呼んでいる)をテンマ船とペアになってザコ網で獲り、エダルという大きな樽に生かしたまま積み込み、本船だけは樽を漕いだり帆をあげたりして沖合に出た。そして鯉の群に近づくと生きた餌を撒いて鯉を近くへ寄せて釣るのである。⁽¹⁸⁾ 詳しい漁法については割愛するが、一応釣り終わると帰港するのであるが、その日のうちに帰港することもあったが、翌朝になることが多かったという。

鯉漁は大正初期までは、まだ活況を呈していたが、そのころになると山川港方面から動力船が進出してきたために屋久島沿岸の鯉群は次第に島から遠ざかってしまい、それまでのように帆船での操業は困難となった。そして一部の人は銀行の融資を受けて

動力船に切り替えて一時的には成功するが、結局は長続きせず、以後は鰹漁に代わって鯖漁や飛び魚漁に力を入れるようになったという。⁽¹⁹⁾

(二) 飛び魚漁

鰹漁に代わって漁業の中心になり出したのが飛び魚漁である。飛び魚は長い翼を持ってしばしば空中を飛ぶ異様な魚であるため、初めは地獄の魚・毒魚などと言われて捕食する者はいなかった。屋久島沿岸には昔から多くいて、先に述べた鰹の餌用としてキビナゴを網ですくうところの毒魚が次から次へと入って来、一日中邪魔されて鰹漁に行けないほどだったという。しかし天明三年四月八日、誰かの発想によって飛び魚獲りを始めたのが、この漁の始まりだと伝えているが、⁽²¹⁾またそれよりずっと古く慶長年間頃だという記録もあるらしい。⁽²²⁾

起源はとにかくとして、飛び魚漁は鰹漁と並行して行なわれていたが、大正時代初期に鰹漁が衰えるとともに、代わって漁業の中心になった。ただ漁期が鰹漁ほど長くなく五月上旬から七月上旬までの二ヵ月間であるため、それを専業とするわけにはいかなかった。しかし、逆に農業を中心にしても季節的に参加することができたし、獲った飛び魚の加工に女性の力も必要としたので、大正初期から昭和三十年代までは、鰹漁の時以上に島をあげて漁業に熱心だったと言える。

飛び魚は八十八夜頃から半夏生の頃までの間、沖合から屋久島沿岸の森林の蔭になった所のモロ

(ムロ)と呼ぶ海藻に産卵するために大群をなして押し寄せるのである。雌が産卵するとそこへ雄が精子(ニゴリという)を出し、そのあと海面近くへ浮きあがって再び沖合に逃げて行くのであるが、そこを待ち伏せして網でとるのが飛び魚漁である。この魚は一般に大きな群れをなして回遊するので、その群れの動きを的確に判断して網を入れ、タイミングよく引きあげることが必要で、うまく群れを捕えられれば大漁になるし、さもなければ一尾も獲れないということも珍しくなかった。したがって同じように出漁しても、部落によって、また船中によって好・不漁の差があり、そのためエビス神を中心に豊漁祝いや豊漁祈願が盛んに行なわれた。漁をするグループは、二隻のテンマ船と一張りの網が一つの組をなし、それに携わる者十二人位で一つの船中を構成しており、各部落には幾船中、幾十船中とあり、男手の足りない時には飛び魚漁に限っては女性でも船に乗り込むことが許され、それでも足りない場合には熊本県天草あたりから乗り子を雇ったりしたという。獲った魚は船中ごとにすぐ浜で各家々に分配され、冷凍船のない時代には、腹わたを出して洗って塩をして大きな樽に一晩位つめたあと、再び取り出して一日半ほど乾して問屋に売ったという。したがって飛び魚漁の時期には、屋久島のほとんどの家が漁家になつて老若男女が参加したため、その漁業開始期や終了時の祝い、不漁時のマンナオシ等は、鰹漁の時以上に部落をあげて盛大にかつ真剣に行なわれていた。

しかし、昭和三十年代末ごろから飛び魚は島の沿岸に寄りつかなくなったため、ほとんどの家では飛び魚漁から手をひき、改めて漁業を専業とする者だけが沖合はるかで、ロープ引きという大々的な

飛び魚漁を行なうようになったのである。

(三) 漁の祝祭

漁業に関する儀礼について触れておきたい。次の五章で述べる部落ごとの実態説明と若干重複するが、各部落にほとんど共通すると思われるものについてのみ、述べることにする。いずれも豊漁祈願とその感謝の気持を表わすものであって、部落共同で行なったり船中単位で行ったりするのであるが、そのいずれの場合にもエビス神に対する参拝を欠かせないことにしているのである。ただ、現在聞くことのできるのは、ほとんどが飛び魚漁関係のものである。おおよそ明治三十年以前に生まれた方の中には鰹漁に従事した人もあるにはあるが、当時はまだ若くて儀礼の主役を果たす年齢ではなく、その内容については残念ながら断片しか知りえない。また既発表の論文・報告書を見ても、管見の及ぶ限りでは屋久島の鰹漁関係の儀礼にまで触れているものは見つからなかったのである。

(ア) 船祝い　どの部落でも一月二日に船主宅に集まって行なっていたし、現在でも漁を続けている所では祝っている。一湊部落の例を、川崎氏の書かれたものを引用する形で述べてみる。⁽²³⁾二日早朝、船主が馳走と神酒、白紙に包んだ米・塩を持って浜に行き、トリカジから乗り込んで船霊の前に供えて拝礼する。そのあと神酒を少し飲み、米・塩をトリカジ、オモカジの順に海に投げ入れて海を清め、オモカジから船を下りる。つづいて同様な供え物を浜のエビス神にもするが、エビスには「大漁○○

丸」と書いた長さ六尺位の紅白の布の旗も奉納した。これらをすませると船主宅で船祝いが始まる。船祝いは午後二、三時頃から始め、この時一年間同じ船中として乗り込む者同士が初めて正式に顔を合わせることになる。即ち船祝いであると同時に、乗り子たちの勢揃いの機会であった。船主は船祝いに集まる乗り子や親戚の数だけ膳を用意し、床の間の掛軸もエビス神のものに代える。全員膳についたら、船霊に供えた神酒の残りを船主が全員について廻ったあと酒宴に入るが、決まった歌などはないが、とにかく無礼講の飲み放題で夜明かして飲むという。帰りには船主が乗り組員全員に手ぬぐいと船餅を配るという。

(イ) 漁業開始期の儀礼　そろそろ飛び魚が獲れ始めようかという八十八夜前後に、船主が浜のエビス神に豊漁を祈願したあと、乗り子が船主宅に集まって飲食を共にして祝った。この際楠川部落では、若い者を代表にたてて石塚岳まで豊漁祈願の岳参りに行かせ、他の者はエビスに参拝して祈るといふし（麦生部落でも岳参りはした）、宮之浦部落ではこの頃までに各船中ごとに益救神社に願かけをし、神官からもらった網札や船札を網にくくりつけたり船に貼ったりして出漁の準備をすませておくという。(ウ) 初漁の祝い　漁期に入り最初の漁獲のあった時にはオスケの祝いをする。これは次に述べるイダケの祝いと形式的には同じであるが、より大々的に行なうものである。

(エ) 平素の漁祝い　毎朝漁から帰ってくると少しでも漁獲があればイダケの祝いをする。各部落の実態説明のところで少しずつ述べておくが、例えば湯泊部落の場合には船が港に入ってくると、各船中

ごとに若い漁師が魚二尾を持って海に飛び込んでエビスの所まで泳いで行って腹合わせにして供えて拜んだ。そのあとオサ（赤いエラのところ）だけ取ってエビスの前に残し、身は持ち帰って他の魚と一緒に刺身にして酒を飲みながら食べるのだが、エビスに供えた魚の身は乗り組員は必ず一切れは食べなければならぬとされていた。このように船中ごとに飲食を共にする前に、船（飛び魚テンマ）の真中（船霊を祀る所）に塩・米を供え、神酒（焼酎）をふりかけて拜むのである。これは原部落の所で述べる鰹漁のイダケ祝いと共通する部分が多く、鰹と飛び魚の漁獲儀礼の連続性が推測される。

(オ)豊漁の祝い そのシーズンの飛び魚の漁獲高の合計が五万とか八万とか十万尾とか区切りよい数を越えた時には、その都度マンノ供養とかマン越しの祝いとかいって船主宅で大々的に祝った。この時には船に旗を立て紅白の布を舳先につけたりし、船主は乗り子に手拭を配ったりした。またその紅白の布をエビス神の像に巻きつけたりもした。

(カ)不漁の時の祈願 不漁の時にはマンナオンといって、エビス神に祈願したり、神官や僧侶に祈ってもらったりしたあと、飲食を共にした。楠川部落の場合には、部落全体が不漁の時には僧侶を招いて漁まつりをしたが、まず皆で各エビス神に参ったあと、各船中ごとに浜で飲食した。漁まつりをしようという前日には、青年が「あしたは野止め、山止めで漁まつりです」と一軒一軒知らせて歩くと、当日は誰も肥扱いはせず、野山の仕事は休みになったという（飛び魚漁の盛んな頃には、漁師でなくてもこの漁だけには参加していたからムラ休みにできたのである）。また、自分の船だけが不漁の時には、船主が

小豆飯を炊いて神酒・塩と一緒に船に供え、オセエモンサマ（船大工でこの神を持っている人）に頼んで船を拜んでもらったあと、船主宅に集まって船中で飲んだという。

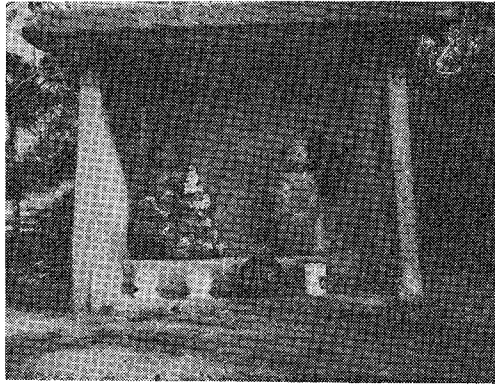
（＊）漁業終了期の儀礼　どの部落でも半夏生前後に飛び魚漁終いの祝いをした。シーズン最後には日を決めて計算祝いとして大いに祝うが、その年大漁のあった船中では船主の家にマンゴシの紅白の布を張りめぐらし、女子供も集まって飲み食いし、踊った。この時ご馳走として冷しソーメンの出るのが慣わしだった。原部落の場合には右のようなこととともに、各船中で語り合って氏神益救神社へ参り、さらに船中ごとに代表者が岳参りに行った。岳参りといっても奥岳まで行くのではなく、部落背後の平石・山口という奥岳への登り口（そこには松の太木があつて神が祀つてある）まで行き、奥岳の名前を叫び、飛び魚漁終了のお礼を言上して帰るのである。

五、エビス神信仰の実態

（一）永田のエビス神

ここは、向江、叶、新町の三つに分かれている。永田全体の神社として永田嶽神社がある。かつては鰹漁が盛んで、加工工場もあった。

（1）種類と神体



永田のエビス神

④向江のエビス。向江町の漁家で祀るエビスで、港の入口にある。道路拡幅のために祀る場所を少し移動させ、昭和五十四年五月に祠を新築した。コンクリートの祠の中に、烏帽子姿の土製エビス像一体（高さ三〇センチ位）と瀬戸物製のエビス像、大黒像各一体（高さ各々二〇センチ位）が祀られている。祠の向かって右に磨滅した自然石があり、水神だといわれている。

⑤叶のエビス。叶町と新町の漁家で祀るエビスで、永田川河口にある。コンクリートの祠の中に、木彫のエビス像、大黒像各一体（高さ各々三〇センチ位）と、磨滅したエビスの石像（高さ二五センチ位）と、金銅製の大黒像（高さ二〇センチ位）が祀られている（写真④）。

⑥灯台の所のエビス。明治四十年の銘がある。岬の尖端の灯台のあたりは、かつては鰹の好漁場だったので祀られるようになったといわれ、このエビスをカツオのエビスと通称している。

(2) 祀り方

○ かつて飛び魚漁の盛んであった頃には、十日エビスといって旧暦三月十日にエビス祭りをした。

各町内ごとに④または⑤エビスの前に大人も子供も弁当を持って集まり、各自波打際のきれいな砂をツワ路の葉にのせてエビスに供えて拝んだあと、一日中そこで遊び青年はその前で籠った。

特に④エビスの前では向江町の老婆たちが飛び魚招きをした。磯着物を着、襷がけをした老婆たちが、三メートルほどの青竹にさした菅笠に紅白の木綿布をさげたものを持ち、大石の上に立って海に向かって振りながら飛び魚を招き、豊漁を願う踊りをした。⁽²⁴⁾飛び魚漁の衰えた現在では、この踊りは旧暦四月八日のお釈迦様の日の行事と合併し、釈迦が流れ寄ったというヨツデの浜という所で行なわれている。

○ 初めて飛び魚漁に出る時には、その前夜カコドリといって船持が乗り子を招いて祝ったが、その時にはエビスにもお参りに行った。また、不漁の時には船主がお神酒を持ってエビスに供えて拝み、マンナオシといって家へ乗り子を集めて飲んだ。朝、飛び魚漁から帰ってくると、船の上からエビスに向けて「エビスさんにあげます」といって飛び魚を二尾投げ供え（実際には海中に落ちる）、陸にあってからも供えに行った。

○ 鯖などの一本釣りに行って魚が自分のだけに食いつかない時には、心の中で「エビスさん！」といって祈る。

○ エビスは二人の神で、兄弟だという人がある。

(二) 吉田のエビス神

吉田には現在鯖釣り船に乗って隣の一湊から出漁する人が多い。かつては飛び魚に七船中位あった。森山神社があり、宗旨はほとんど浄土真宗。

(1) 種類と神体

祀る場所は一カ所で、海岸の石の小祠の中に磨滅した三体の石像があり、これをエビスと称している。このエビスはかつて鹿児島から来た鯉船に盗まれたともいうし、また明治三十三年生れの人が父から聞いたところによると、この浦で飛び魚の豊漁の続いた時にそれにあやかろうとして永田部落の人に盗まれ、いくら返してくれといっても戻してくれなかったので作りなおしたのだともいう。

三体のうち首の欠けているのがもとの古いエビスで、他の二体は昭和二十五年前後に一湊部落にいた彫刻の上手な人に刻んでもらい、益救神社の官司にオタマシを入れてもらって祀っているのだという。また、日高森之助氏によると、かつて蛸とりをしていた時に深さ三尋位の海底にエビス像に似た石があったので引きあげ、小学校長にオタマシを入れてもらって祀ったものがあるというが、それがどれだかは確認しえない。

最近売りに来たエビス・大黒像を買って床の間に祀っている家もある。

(2) 祀り方

○ エビスの祭りは旧暦三月十日である。前日に青年達がエビス祠の周囲を掃除し、新しい禪に締

め直して祠の中の三体すべてのエビスを海水で清めて、翌日の祭りに備える。十日には、船持・網主などがエビスにお神酒を供えて拝んだあと、青年を中心に漁をする人達が出てエビスの前で飲食を共にする。その時、かつてはエタビ（飛び魚を網からすくって船に入れる漁具）を持ち海に向かって、豊漁を願う歌を歌いながら飛び魚を招くしぐさをしたという。

○ 漁のあつた時には、船が港に入る時エビスに向けて「魚あげます！」といって飛び魚を投げ供えた（実際には海中に落ちる）。大漁の時には、飛び魚を腹合わせにして二尾供えた。

○ 五万越し、十万越しの祝いや漁最後の計算祝いの日には、船主がエビスの頭に神酒をふりかけから紅白の鉢巻をさせ、そのあと船主宅で乗り子を集めて飲んだ。

○ 五挺櫓で船を漕いでいた時の櫓漕ぎの掛け声の中に、風があると帆があげられるのに風が吹かないからこのように苦しんで櫓を漕がねばならない、これもひとえにエビス様がミンツン（鰻）でわれわれの願いを聞いてくれず風を吹かせてくれないからだ、という文句があり、かすかにエビスに不具神の伝承をみてとれる。

○ 水死体をエビスと考える風がわずかにある。一般に水死体を見つけたらトリカジから引き上げて反対のオモカジから下ろせとか、引き上げる際に、漁をさせるか否かの問答をせよとかは言っているが、それをエビスと考えて歓迎する風はない。しかし、太平洋戦争中、よく兵隊の白骨死体が浜に流れ寄ったが、その時「ああ、ここにもエビスがすもっていたよ」と言って埋めてやったという。

○ 飛び魚網につけるイワ石を新調する時には、引き潮の時に浜辺で探したり潜ったりして手頃な石を見つけ（その時、目隠しをしたりはしない）、それをいったんエビスに供えて拝んでから網に取りつける。その年の漁が終わると、網をばらして川の水で塩を洗ってから干して持ち帰るが、不漁の年にはイワ石は海に戻し、翌年また新しく求める。豊漁の年には持ち帰り、翌年も同じイワ石を用いる。豊漁であったがイワ石が欠けたりすると、その石は捨てたりしないで船神として家に祀ることがある。

（三）一湊のエビス神

一湊には漁業に従事する者が多い。鯖漁が盛んだが、鰹漁、飛び魚漁も盛んだった。大敷網もある。八幡神社がある。真宗の寺もあり檀家も多い。

（1）種類と神体

④ 浜のエビス。港入口の小高い場所にあり、石の小祠に納められた高さ四〇センチ位の石像で、漁師のエビスと考えられている。

⑤ 町エビス。公民館近くの広場にあり、石の小祠に納められた高さ五〇センチ位の木像で、鮮やかに彩色されている。かつては部落中央に祀られていたが、道路拡幅に際して数カ所を転々とし現在地に祀るようになった。今の神体は五年ほど前に家大工が彫ったもの。古いのは白蟻に食われてぼろぼろになってしまった。

◎大敷網のエビス。かつて元浦の海岸の突き出た岩の上に祀っていたもので、直径二〇センチ位の自然石という。大敷網のために雇っていた甕島の人達が祀っていたもので、現在ではご神体は確かめられない。

①大敷網のために元浦の納屋に祀られていたエビス。高さ一五センチ位の木彫のエビス像、大黒像で、納屋を使わなくなってからは漁業協同組合の事務室に祀られている。なお漁協の神棚にはこのほか、最近購入した立派なエビス像、大黒像も祀られている。

(2) 祀り方

○ かつてエビスの祭りといえば、オギオンさんの日(旧暦六月三日)に船主や青年会の幹部が④エビスに幟をあげ、お神酒を供えて拝み、漁関係の人がお参りに行くだけだった。しかし昭和四十年頃から漁協が中心になってエビス祭りを行なうようになり、様子は変わった。すなわち、当日は④エビスをきれいに洗ってから神体を白布で巻き(神体に人の息をかけてはいけないのでマスクをかけてする)、港の入口から町の中の⑤エビスの横まで移し、④⑤エビスを並祀して化粧をさせる。そのあと神官を招き、漁協が船主や漁関係の人を集めて祭りをするのである。

○ 旧暦八月十五日夜に青年達がカズラを芯にした太綱を引き合うが、かつてはその綱を丸めて⑥エビスに供えたあと綱引をしたという。

○ 大敷網の経営は一湊でしたが、実作業は甕島の人々にまかせていたことがあった。その頃、冬

の網を入れる前に、その年大敷網に加わった若者二人に目隠しをさせて海中に潜らせ、最初につかまえてきた石一個ずつを漁師のエビスと考え、海に突き出た岩の上に祀って小さな屋根をかけておいたという。これが㊤エビスである。夏の初めに大敷網をあげたあとは、そのまま放置しておいた。十日エビスといって大敷網の期間中は毎月十日に、漁協の役員と大敷網に関係した人々が、㊤㊤エビスに供え物をし、焼酎を飲み魚を食べて祝った。

○ かつては旧暦二月十五日にも、浦まつりといって漁関係の人々が㊤エビスに幟を立てて祝った。

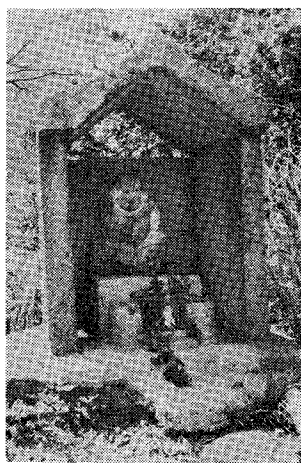
○ 漁をして帰ってくると、飛び魚漁の時だけは㊤エビスに向けて、「エビスッ!」といって船の中から二尾投げ供える。また、飛び魚漁開始期・終了期はもちろん、豊漁の時には㊤エビスを祝い、不漁の時には祈った。

四 志戸子のエビス神

志戸子は半農半漁の部落。漁業専門の人も多い。住吉神社がある。ほとんど真宗。

(1) 種類と神体

㊤ 高さ三〇センチ位の鯛を抱いた木像で小祠の中に祀られている。彩色してあったようだが、今は色がはげている。一度毀れた木像を大正時代ごろに、真辺幸次氏という船大工が（熊本清次郎氏という人もいる）彫刻したものが現在のエビス像だという。古くは部落の中央に祀られていたらしいが、現



志戸子のエビス神

在は海岸の所に移してある。この場所にはかつて魚見をする大きな松が二本あった。㊦エビスが港の近くに移される前には、この㊦エビスが家々から最も便利な位置にあったため、中心的なエビスと考えられていた(写真㊦)。

㊧港の近くにあり、高さ二〇センチ位の石像。現在の志戸子における中心的なエビス。かつて志戸子の港は志戸子川河口にあり、㊧エビスも河口右岸の崖上にあつて部落から遠くて不便であつたが、港が現在地に移つたので㊧エビスも今の所に祀りなおしたという。

㊨港を見下ろす崖の上にあり、石像。

○ このほか形のよい石を海中から拾つてきてエビスとして祀っている家もある(例、竹之内徳清氏宅)。

(2) 祀り方

○ 一月十日(かつては旧一月十日)に、十日エビスといつて船持が中心になつてエビスを祀る。お神酒・塩・米一升・小豆一升・麻一筋・草履等の供え物を㊦㊧㊨エビスにし、㊧エビスの前で飲食をするが、船大工にも来てもらうので、供え物の大部分は船大工に持ち帰ってもらうという。飛び魚漁の盛んな頃

には部落中すべての家々が参加した。

○ 四月三日にも船持が十日エビスと同じことをする。この日は女の節供なので女の人も浜へ出て遊ぶ。

○ 旧暦六月六日は浦祭り。船持達が十日エビスと同じように④⑤⑥エビスを祀り、各エビスに赤ネ(赤い糰)を巻く。飛び魚漁の盛んな頃には④エビスの前で、⑤エビス移転後は⑥エビスの前で部落中の人々が出て飲食を共にし、踊りや演芸・相撲などをして楽しんだ。

○ 飛び魚漁の時のみ、漁から帰ると船の上から④⑤⑥エビスに向けて魚を投げ供えた。漁開始期や終了期や豊漁の時には必ずエビス(④⑤⑥)に参り、不漁の時にも祈願に行く。

○ 漁から帰ると毎日、主として⑤エビスを拜む。

○ エビスは龔だといい、お参りする時には「漁させてくれ」などと大声で頼まなければならないという。

○ 水死体を発見すると、漁をさせてくれるので必ず拾っていけといわれている。その時はトリカジからあげオモカジの方から下ろすのだが、引き上げる時には「助けるから漁をさせてくれ」と大声で呼びかけるべきだという。水死人はエビスさんだともいう。

上屋久町の中心地。漁業に従事する人も多い。もと県社の益救神社がある。日蓮宗の寺もあり、檀家も多い。

(1)種類と神体

①水洗尻のエビス。益救神社に相殿として祀られていたが、明治五年三月三日に、現在地水洗尻に遷座したという。神体は鏡(「蛭子御神鏡」と記す)であるが、小祠の中には丸い石も一緒に祀られている。『三國名勝図会』記載の蛭子宮は、この①エビスらしい。

②火の神山のエビス。高さ五〇センチ位と三〇センチ位の石像で小祠の中に祀られている。現在地一品が浦へ流れ寄ったのを祀ったと伝えられており、石田尾善之助氏(故人・船主)が川向えの火の神山の神社と共にこのエビスの管理をしていたという。火の神山は荒々しい神の鎮座する場所といわれているので、このエビスへも特別な祭りの時以外はお参りに行く人がいないようである。

③高瀬のエビス。石像だというのが確認はしていない。

(2)祀り方

④一月十六日に船主達が益救神社で今年の豊漁を祈願したあと、①②③各エビスに参り、④エビスの前で船中ごとに盃を交わして祝う。

⑤益救神社大祭が四月十日で、その次の日の十一日が漁祭り。船主一同各エビスに参る。

⑥五月五日は船漕ぎ競争などがあって浜は賑わうが、各エビスにお参りにも行く。

○ 漁のあつた時には、飛び魚漁の時のみ、船が湾内（川口）に入る時に「エビスにあげる」といって④⑤エビスに向けて船の上から魚二尾を投げ供える。漁開始期・豊漁の時・漁終了の計算祝いなどにも主として船主が各エビスにお参りに行くが、平素は④エビスにのみ参る。

（六）楠川のエビス神

ここには漁業専業者もいるが、現在は農家が多い。楠川天満宮がある。ほとんど日蓮宗で、僧侶を招いて行なう行事が多い。

（一）種類と祀り方

④ 一本松のエビス。部落からやや離れた海の岩の上に祀られており、石像。古くは木像だったという。
 ⑤ 岳エビス。船が入港する際に、このエビスの背後に岳参りの山が見えたから岳エビスと呼ぶのかという。高さ三〇センチ位の石像で小祠の中に祀る。現在は港のほぼ中央部に祀られているが、波止場を築く前には港の入口に祀られており、⑥エビスと共に港の左右で浦を守っている風だったという。
 ⑥ 沖エビスといい、かつての⑤エビスと反対側の港入口の岩の上に祀られている。高さ三〇センチ位の石像で、小祠の中にある。

⑦ 村エビスといい、部落中央に祀られている。高さ四〇センチ位の石像で、魚を抱き烏帽子をかぶった一般のエビス像と変わりがない。その小祠の前には、「天保五年^{甲午}七月吉日」「奉寄進」「施主

楠川住 三角□」と記された石柱が立っている。

(2) 祀り方

○ 旧暦一月十五日と十月十五日（かつては正・五・九月の十五日）の二回、船持達を中心になって部落に伝わるオマンダラを港へ出し、久本寺（日蓮宗、宮ノ浦）の僧侶を招いて拜んでもらい、海上の安全を祈って漁師達は盃を交わす。この日は④⑤⑥エビスにも注連縄を張り、祈禱が終わるまではこの浦から一切船を出させなかった。これは漁師を中心とした行事であるが、かつては区長は漁師でなくとも袴・袴に身を整えて参列したという。

○ 十日エビスといい、現在船主会会長が毎月十日に④⑤⑥エビスに新しい櫛を供えている。

○ 飛び魚をとって帰ると、「エビットウギ」と叫んで船の上から④エビスに向けて数尾投げ供え、船が港に着くと⑤⑥エビスに二尾ずつ供えに行く。それらの魚は、エビス係の当番の人が自分のものにするという。また、八十八夜ごろの飛び魚漁開始期や半夏生ごろの終了期のほか、豊漁の時には特に④⑤⑥エビスを大々的に祀り祝う。不漁の時には④⑤⑥エビスに祈る。

○ ④⑤⑥エビスは漁エビスといわれ、船持・船頭で管理しているが、⑦エビス（村エビス）は部落の祭礼係が管理している。⑧エビスは旧暦一月二十三日と九月二十三日（古くは五月二十三日も）の三夜様、および旧暦八月十五日の岳参りの日に祭礼係がお神酒を供え、灯明をつけて祀る。

(七) 榑川^{たふかわ}のエビス神

榑川には現在では農家が多い。榑川神社がある。ほとんどが真宗である。

(1) 種類と神体

④ 本エビスと通称されているもの。榑川という小さな川の河口にあり、高さ約二五センチの木像で、彩色されている。木の小宮の中に祀られ、小宮ごと石の小祠の中に納められている。小祠の中には他に自然石が一個ある。この河口はかつては鯉船なども入る港で、少なくとも明治末にはすでにここにエビスが祀られていた。

⑤ フカバト（地名）のエビス。海に少し突き出た岩の上に立っている。かつては高さ三〇センチ位の石像だったと伝えているが、現在では高さ一メートル位の石祠の中に木の小宮があり、その中に「南無八幡大菩薩」（表）「昭和五十年六月八日恭す」（裏）（この字は志戸子部落の真宗興正派顕正寺の住職が書いたという）と墨書したタテ一七センチの楕円形の自然石が納められており、これがエビスだと考えられている。木の小宮の横には貝殻が多数附着した自然石があり、前には数個の奇石が置いてある。このエビスをジュウゴサマ（竜宮様？）という人もいる。

⑥ 村エビス。部落ほぼ中央部のお堂の横に祀られているが（少なくとも大正初期にはすでに現在地にあった）、かつては④エビスの近くにあったという。ご神体は直径二〇センチ位の円形の平たい石で、浜から引きあげたものだと言え、朝晩で色が異なるという。木の宮の中に祀られ、それが高さ一メートル

ル位の石祠の中に納められており、前に鳥居がある。

(2) 祀り方

○ 旧暦四月十五日は岳参りの日でもあり、エビスの祭りの日でもある。岳参りに行く代表三人が前夜神社に籠って身を清め、朝神社とエビスを拜んでから部落背後の石塚山まで急いで参り、帰ると部落中に出て㊤エビスの前で飲食を共にした。

○ 八十八夜は飛び魚漁開始期にあたるので、浦祭りといって皆が㊤エビスの前で飲食を共にした。半夏生頃の漁終了期にも同様にして祝った。豊漁・不漁の時にも㊤エビスに参る。

○ 旧暦六月八日には部落の役員が㊤㊤エビスにお神酒や赤飯を供える。

○ 村エビスの祭りは旧暦一月二十三日。この日の午後、神扱いの家(その年の神社当番の家で、二軒)またはその年新築した家を中心になって㊤エビスにお神酒を供え、人々は各自参拝する。昔は朝から赤飯やお神酒、ご馳走を供え、夕方お参りに来た人々にそれらのものを少しずつ分けた。さらに余ったものを神扱いの家へ持参し、そこに部落中の人々が集まって、お神酒・ご馳走等をいただきながら二十三夜の月待をした。現在では㊤エビスに供えたものはすべて二十三夜待の時に分けている。

(ハ) 小瀬田のエビス神

小瀬田は現在はほとんど農家。かつては飛び魚の船中が七つあったという。小瀬田神社があり、宗

旨は日蓮宗の家がほとんど。

(1) 種類と神体

④ 部落に近い浜(古い船着場の近く)の小祠の中に祀られている高さ六〇センチと二六センチの石像二体。

⑤ 古い船着場が条件のよい場所ではないので、昭和三十年ごろに部落から少し離れた所に新しい港を築き、そこにコンクリートを土台にして自然石を立てて祀っている仮りのエビス。

◎ 神社の下の方の上に白い砂を敷いて祀ってあるもので、丸い自然石のようなもの。⁽²⁶⁾

(2) 祀り方

○ 一月十日に青年が神社に籠り、年の祈願と大漁祈願をするが、古くは十日エビスといつて④エビスの前に祈願したという。

○ 旧五月十日の午後、部落の人がこぞって浜へ行き、役員が中心になって④エビスにお神酒を供えて拜んだあと、各人が波打際の小石を皿一杯とつてエビスにあげて拝み、そこで持参したご馳走を食べ合う。

○ 飛び魚漁開始の頃にあたる八十八夜の午後には、部落中の人々が弁当持参で浜へ出、④エビスに対して浜の安全と豊漁を祈願してからご馳走を食べ合った。部落役員が先頭に立ってエビスに祈願する公式行事が終わると、各船主がエビスにお神酒を奉納し、船中ごとに飲み合った。子供や青年の

相撲も奉納された。飛び魚漁終了の頃にあたる半夏生にも、返礼の意味で八十八夜とほぼ同じことが行なわれた。そのシーズン大漁であった船中では、エビスの首に紅白の布を巻いて祝った。また、漁の期間中は、飛び魚漁から帰ってくると漁のあった時には必ず船の上から㊤㊦㊧エビスに向けて数尾投げ供えた。とともに、船からあがるとすぐに二尾ずつ腹合わせにしてエビスに供えて拝み、供えたものはすぐ下ろして船中ごとに浜で刺身にして食べ、一パイ飲んだという。豊漁の時には特に大きく祝い、不漁の時には祈った。

○ 漁専門の人は、浜に出ると必ずといってよいほどエビスに手を合わせて拝むという。

(ハ) 船行のエビス神

ここは海に遠いため、昔から農業を主としていた。大山祇命を祀る船行神社がある。日蓮宗の家が多い。

(1) 種類と神体

寺の入口に魚を抱き烏帽子をかぶった石像エビスが祀られていたというが、現在は盗まれてしまっていない(太平洋戦争後しばらくの間まではあったというが、確かではない)。

(2) 祀り方

○ エビスの祭りについては、記憶されていない。

(三) 安房のエビス神

屋久町の中心。屋久杉伐採に従事する人が多く、この人は山人^{ヤマジン}と呼ばれていた。粟穂神社がある。日蓮宗が多い。

(1) 種類と神体

④ 安房川の右岸河口の突出した岩の上に祀つてあるもの。エビスと呼ばれ、そのように信じられているが、実際は「水神」と記した高さ三〇センチ位の石柱が小祠の中に祀られている。

⑤ 安房川の左岸河口に祀られている。高さ三五センチ位の彩色された木像で、小祠の中に祀られている。古くは石像であつたと伝えているが、太平洋戦争後間もなくの頃、どこか他部落の人が盗んでいったらしく、なくなつたので、当部落の泊氏に新たに彫ってもらつて祀つているのだという。

(2) 祀り方

○ 旧四月十日ごろにハマデバリ（浜出祝い？）といつて、飛び魚漁期を前にしての祝いがある。区長が音頭をとつて④⑤エビスにお神酒を供え、寺の坊さんに拝んでもらつたあと、部落中の人が浜で飲食を共にした。

○ 飛び魚漁の船が港（河口）に入ってくると、船の上から「エビスサマ！」といつて④エビスに魚を投げ供え、船からあがると⑤エビスに「マンタノンドウ（万以上獲れるよう頼む）」といつて二尾供えに行った。また、飛び魚漁開始期や終了期、豊漁の時にもエビスにお参りに行き、不漁の時にも祈

りに行った。

(二) 麦生のエビス神

ここは現在では農業に従事する家がほとんど。弓矢八幡神社がある。日蓮宗の寺があり、ほとんどその檀家。

(1) 種類と神体

④ 浦のエビス。出尻の鼻の下の方、港に近い所に祀られていた。別名鰻のエビスともいわれ、鰻を抱いた高さ四〇センチ位の木像で、美しく彩色されている。明治時代初期に当部落に住みついた土族市橋右エ門氏（漢学者で、寺小屋を開いたという）が求めに応じて彫刻したものといわれ、旧暦四月三日のエビス祭りの前には毎年市橋家で磨いて、色を塗り直すことになっていた。当部落の漁が衰えてから放置されたままになっていたので、郷氏宅で一時保管することにし、昭和五十六年現在は、小さな大黒像とともに同氏宅の床の間に祀られている。

⑤ ^{ジモツ}城のエビス。出尻の鼻の城という場所に祀られているもので、石像。かつては木像のものと二体あったという。

⑥ 田子の浦のエビス。高さ三〇センチ位の木像だったというが、これを祀っていた田子の浦は飛び魚のよい漁場だったので、豊漁を願う他部落の人に盗まれたらしく、現在はなくなっている。これは

別名飛び魚エビスともいわれ、かつて④エビスと同じく市橋氏が彫刻したものと伝えられている。

①かつて部落中央に祀られていた町エビスがあったが、現在はない。明治二十五年生れの人の子供の頃にはあったというが、それより十歳位下の人はすでに知っていない。

○このほか、個人でエビスを祀っている家もある。例えば鎌田氏宅のものは高さ三〇センチ位の木像で、彩色されている。先祖が漁をしている時にザコアミにかかったもので、左縄に縛ってあったのを引きあげて自宅で祀るようになったのだと伝えている。この家はかつての網主宅で、三月十日と十月十日には赤飯を炊いてエビスに供えている。

○港のイエゴンシ（入江の尻）の小高い丘の上に高さ八〇センチ位の石塔があり、リユウオウサマと呼ばれている。戦後盛んに飛び魚が獲れていたのにどうしたことか数年不漁の続くことがあり、その時この浦から魚が去ったのを再び戻らせようとして寺の住職が祀ったものという。漁があると、エビス同様ここへも供え物をしている。

(2) 祀り方

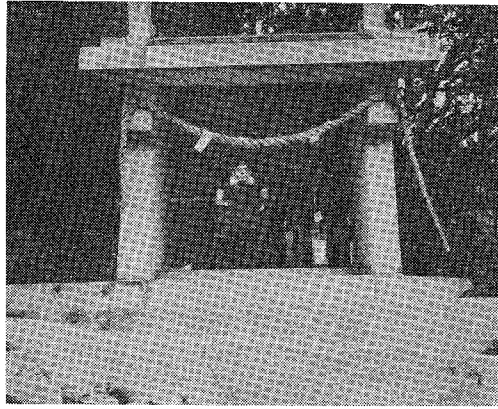
○旧暦一月十日には、十日エビスといって④⑤⑥のエビスに参ったあと、船中単位で船持宅に集まって飲食を共にする。

○旧暦四月三日は岳参りの日で、現在は部落で選ばれた人が高平岳に参って、岳にある小祠の清掃をし、神酒を供えてくるのであるが、飛び魚漁の盛んな時には飛び魚の船中から一人ずつお参りに

行ったという。またこの日はエビス祭りの日でもあった。数日前に青年達が④⑤⑥三つのエビスを持って市橋氏宅で化粧直しをさせ（色を塗りかえ）、この日に再び浜へ下ろしてそれぞれの小祠に祀り、船持・船頭が中心になって供え物をしたあと、夜、飛び魚組の船中ごとに船持宅に集まって飲み食いしたのである。ちょうど飛び魚漁開始の時期にあたるので、豊漁祈願の行事とも考えられる。なお、この日は朝から肥扱いはするなという。

○ 飛び魚を獲って帰ると毎朝、船頭たちは焼酎を携えエナゴ（船の潮を汲み出す道具）に飛び魚を入れて担ぎ、④⑤⑥エビスに供えて歩いた。供えた魚はすぐ下ろして船に持ち帰り、船中の人達で刺身にして食べーパイ飲むのだが、この刺身は味付けせずに皆で一切れずつ分けて食べるという。イダケの祝いという。また、漁開始の前日と終了期および豊漁の時には特別に④⑤⑥エビスに参って祝う。不漁続きの時には、船中単位で④⑤⑥エビスと船持宅の船神を拜み、寺の坊さんを招いて祈禱してもらう。

○ 鰹漁の盛んであった頃には、釣つてくると④鰹のエビスに供えていた。また、豊漁の時やシンズン終了時には④エビスに旗を奉納し、その前で、バナナの木を鰹の形に切つてそれを皆で釣る真似をした。海にザコを撒く真似だといって金をばら撒き、子供に拾わせたりもしたという。これらはカツオの船中単位にしていた。



原のエビス神

(三) 原のエビス神

この部落は農業を主とするが、かつては漁の盛んだった所。益救神社がある。日蓮宗の寺があり、ほとんどこの檀家。

(1) 種類と神体

現在原部落には、エビスは石の小祠に入れられた高さ五〇センチ位の木像のもの一体しか祀られていない。港の小高い場所に鎮座している。これは昭和五十三年末に、古いエビス像が虫に食われてボロボロになったので、当部落の川東一二氏に楠の木（この木は白蟻がつかず割れにくいという）で彫ってもらい、神主に古いエビスの魂を抜いて現在の新しいのに入れてもらったものという。魂を抜いた古いエビスは焼却したという。

このエビスにはいくらかの変遷がある。明治二十九年生れの人が若い時に父親から聞いたところでは、この浦には木像の鰹エビスと、離れた別の岩の上に祀られた自然石のザコエビスとがあった。そのうち次第に飛び魚漁が盛んになったので、形のよい石を見つけてきて鰹エビスの横に飛び魚のエビスとして並祀したという。かくして明治二十九年生れの人のまだ若い頃には、木像の鰹エビスと自然

石の飛び魚エビスとが木の祠の中に並祀され、離れた岩の上にザコエビスが祀られている状態であった。そのうち鰹漁が衰えたのにもない餌としてのザコを必要としなくなったので、ザコエビスを単独で祀ることをやめ、鰹エビス・飛び魚エビスと同じ祠の中に移して、鰹エビスを中心にして向かって右に飛び魚エビス、左にザコエビスというように三体を並祀した。そして、鰹エビスだけが魚を抱き烏帽子をかぶったいわゆるエビスの姿をし、他の二体は自然石だったこともあり、かつ同じ小祠に祀られていたこともあって、鰹漁が衰え飛び魚漁が盛んになってからも、何となく鰹エビスがこの浦の代表的なエビスと考えられていたという。そのうち港の改修などでエビス祠を移動したりしているうちに二体の自然石エビスは行方不明になり、木像の鰹エビスだけが残った。これがすでに述べたように古くなり虫に食われたので、新しいのに作りかえ、がっちりした石の小祠の中に祀り直したのである。したがって原部落には、鰹エビス、ザコエビスそれに飛び魚エビスがあったが、現在ではそれらを統合した形の一つのエビスだけが祀られているというわけである(写真㉔)。

○ エビスとは別に自然石の浦島様というのが港の口に祀られている。これはジュウゴサマ(童宮様?)のお使いだとされ、港の入口にあって人々の安全を守ってくれているのだと信じられている。この浦島様にはホイドン(神宮)ではなくて、寺の坊さんが祈禱することになっている。飛び魚まつりや港の掃除の時にも、浦島様だけは坊さんに来てもらって拜んでもらうという。

○ 船持の家(例えば安藤長右衛門氏宅など)には、個人でエビスを祀っている家がある。

(2) 祀り方

○ 旧暦一月十日と十月十日には、十日エビスといって船主・網主が中心になってエビスに祈願し、他の漁関係の人も港に集まって祝う。

○ 旧暦四月三日には、部落の人々がエビスに参拝し、その前で飲食を共にして祝った。

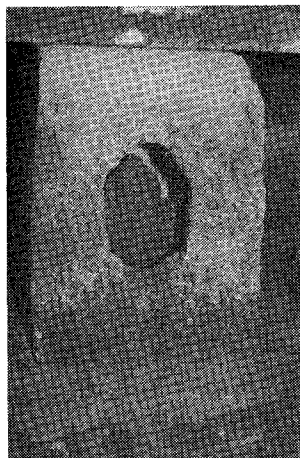
○ 旧暦六月十五日は祇園祭りといって部落の益救神社の祭りであるが、その翌日の十六日はエビス祭りといい、皆がエビスに参り、神官に祝詞をあげてもらった。エビスの前で芝居をしたり相撲をとったこともあるという。

○ 飛び魚の獲れた時には必ずエビスに供えて祝うほか、初めての漁のあった時や漁終了の時、さらに豊漁の時には特に大きく祝う。不漁の時には、マンナオシといって船中単位で家族すべてが浜に集まってエビスを拝み、神官に祝詞をあげてもらって魚が寄るように祈願した。

○ 鰹をとってくると、毎朝、お神酒と一緒にいったん鰹のエビスに二尾供えて拝礼したあとすぐ下ろし、ヒチミキという赤い心臓(肝臓?)部分だけを取り出して供えておいた。身は刺身にして再び十二切だけツワ蒔の葉にのせて供えに行く。その刺身はまたすぐ下ろして船中の者で必ず分けあって食べたという。

○ ハチマワリといって、毎月交替で船主・網主がエビス祠の周囲を掃除したり花を供えたりする。

○ 漁のない時には、船の上で「エビスさま、たもいや」といって祈る。



尾之間のエビス神

○ エビス鳥といって、ヒヨドリ位の大きさに、全体的に赤く嘴の長い鳥がいて、それをとると漁があるといった。出漁の時その羽根を持って行き、リョウゴサマにあげますといって海中に投じて願いごとを唱えたと豊漁になると信じられていた。

(三) 尾之間のエビス神

ここはかつては漁業が盛んであった。保食神社がある。日蓮宗が多いが、真宗の家も少なくない。

(1) 種類と神体

④ 国民宿舎尾之間温泉横のエビス。高さ二〇センチ位の石像が石祠の中に祀られている。これをザコエビスと呼ぶ人もいる(写真⑩)。

⑤ 港の崖の中腹にあるエビス。そこには、磨滅した木像と自然石の平たい石柱が祀られている。カツオノエビスという人もいる。

⑥ ウオマチノエビス。石像。燈台近くの瀬のはずれの小高い場所に祀られていたと明治二十一年生れの人はいうが、若い人はほとんど知らない。

⑦ 町エビス。高さ二〇センチ位の石像で石祠の中

に祀られている。④エビスと形態は酷似している。現在、屋久町自然休養村管理センターの敷地内にあるが、かつては部落中央部の路傍に祀られていたという。

(2) 祀り方

○ 旧暦一月十日を十日エビスといい、①エビスの前にゴザを敷いて青年や船主・網主などが飲食を共にする。部落全体の行事である。

○ 旧暦四月八日を飛び魚まつりといい、④エビスの前に飛び魚漁に関係する人（実は部落中のほとんどの人が集まって、エビスを拝んだあと飲み食いして過ごす。若い者が相撲をとったこともある。⑤エビスの前にも供え物はしに行く。

○ 飛び魚を獲って帰ると、④⑤エビスに供えに行き祝った。飛び魚漁開始期と終了期および豊漁の時には、④エビスの前で特に祝った。不漁の時には寺の坊さんに祈願してもらったが、エビスにも船中ごとに祈った。

○ 鯉の獲れた頃は漁から帰ると、⑤エビスに二尾供えたあとすぐ下ろして船中ごとに祝ったが、その方法は原部落で述べたことと同じである。

(四) 小島のエビス神

ここはほとんど農家。小島神社がある。真宗の家が大部分。

(1)種類と神体

④飛び魚エビス。浜に祀られている。浜エビスともいう。

⑤町エビス。かつては部落中央部に祀られていたが、道路拡幅の際に神社境内に移された。石祠の中にあった石像である。

○ 専業漁師の家にはエビスを祀っている家がある。例えば岩川勇吉氏の場合、熊本県天草の牛深の人が彫刻したエビスを（そこですでにショウワ魂を入れてもらってある）、天草の知人から送ってもらって祀っている。

(2)祀り方

○ 一月二日のほか旧暦一月二十三日には船主の家に漁関係者が集まって祝うが、その時、船主は④エビスと屋内のエビスにお神酒など供えて拝むという。

○ 飛び魚がとれた時には④エビスにお神酒と一緒に二尾供えに行く。また、漁開始期と終了期、それに豊漁の時には④エビスに供え物をして特に祝う。

○ 旧暦八月十五夜の綱引は、かつて⑤エビスの前でした。

○ エビス鳥という赤い鳩ぐらいの大きい鳥の毛をまつると漁によいといい、船霊様として祀っている漁師もある。

(四) 平内のエビス神

現在は農業が中心。八幡神社がある。真宗の家が多いが、日蓮宗も少なくない。

(1) 種類と神体

④ 港と少し離れた所で、海に突き出した崖の上に祀られているエビス。これが当部落で通常いうエビスである。一坪ほどの区画内に、磨滅した木像三体と同じく磨滅した石像らしきもの一体、それに「恵美須神」と記された石柱がある。石柱には「慶応三年丁卯十二月吉日」とある。

⑤ 浜の峯という所に祀られていたもので（今でもあるかも知れないが確認できず）、石柱で、鰹のエビスと呼ばれていたという。鰹漁が衰え飛び魚漁が盛んになってからは、あまりまつられなかったようである（大正時代生まれの人では、このエビスについては知っていない）。

(2) 祀り方

○ 旧暦四月八日は飛び魚まつりの日で、漁に関係する人がすべて④エビスの前に集まり、船主の拝礼のあと、皆でエビスの前で飲食を共にした。

○ 飛び魚が獲れると、船主が魚二尾とお神酒を持って④エビスに参ったあと、海岸で船中ごとに祝った。魚が獲れない時には④エビスに祈願に行き、自分の船だけ不漁が続くと、日蓮宗の坊さんを頼んで祈願してもらった。

○ 鰹が獲れた時には⑤エビスに供えに行ったが、その祀り方は原部落のほとんど同じである。

(4) 湯泊のエビス神

湯泊は農業が中心だが、比較的漁も盛ん。大山祇命を祀る湯泊神社がある。ほとんど真宗。

(1) 種類と神体

④ 港の崖上に祀られており、石祠に入った高さ七〇センチ位の石像。飛び魚漁のエビスと考えられている。ここのエビスは古老の記憶によれば木像だったこともあり、医師佐々木武氏が当部落の豊漁を祈ってどこから求めてきた金銅製のものであったこともあるが、盗まれてしまったために現在のものを祀るようになり(三十年位以前のことかというが確かではない)、もう盗まれないようにコンクリートで固定してしまっている。

⑤ 鰹のエビスと考えられているもので、④エビスと同じ崖の側面に一メートル位の石祠があり、その中に「文化十二年 絵工夷、大黒天 六月吉日」と記された石柱を現在は一応エビスとしている。しかしこのエビスには変遷がある。かつてはもっと部落に近い浜道アザという場所に木像のエビス像と大黒像が並祀されており、その横に右の石柱があった。鰹船の船頭岩川新平氏が主として世話をしていたが、鰹漁も衰え岩川氏も亡くなってお参りに行く人も祀る人もいなくなり、木像は腐り果ててしまった。あまりにももったいないので、その後石柱だけ現在地に移しそれをエビスとして祀るようになったのだという(今から三十年位前のことだというが年代は確かではない)。

(2) 祀り方

○ 旧暦四月八日には浦祭りといって、㊤エビスを拝んだ。

○ 八十八夜にも浦祭りといって、午後海岸に出て㊤エビスを拝んでから飲食を共にした。

○ 飛び魚を獲って船が港に入ってくると、若い漁師が魚を二尾持って海に飛び込んで㊤エビスの所まで泳いで行って腹合わせにして供え、拝んだ。そのあとすぐオサ(赤いエラのところ)だけを取ってエビスの前に残し、身は持ち帰って船中で刺身にして食べたが、この刺身は必ず一切れは食べるべきだと考えられていた。その他、豊漁の時や漁期終了の時には特に㊤エビスに供えものをし、大々的に祝った。不漁が続く時には神官に祝詞をあげてもらったりしてエビスに祈願し、そこで船中ごとに飲食を共にし、踊ったという。

○ 鰹漁の盛んな頃には、盆の十五日に青年が㊤エビスに手踊りを奉納した。

(c) 中間のエビス神

ここは現在では農業が主。大山祇命を祀る中間神社がある。ほとんど真宗。

(1) 種類と神体

港の石祠の中に、木彫の高さ四センチ位のエビス像と高さ三〇センチ位と二〇センチ位の大黒像が祀られており、これらをエビスと呼んでいる。これらはかつて、隣の栗生部落へ行く海の眺めのよい場所にあったが道路拡幅のため部落中央に移され、そこも墓地拡張にひっかかって数年前に現在地に

祀られるようになったのである。明治二十八年生れの人の知る限り当部落にはエビスはこれしかなかったという。鰹漁の盛んだった頃も飛び魚漁が盛んになってからも、一貫してこのエビスを皆で祀っていたという。

(2) 祀り方

○ 八十八夜が部落全体の浦祭りの日で、エビスの前にお神酒を供え、神官を招いて祝詞をあげてもらったあと、エビスの前で皆飲食を共にした。この頃がちょうど飛び魚漁開始の頃であった。飛び魚漁終了の半夏生の頃にもエビスに参り、大漁した船中では特に大きく祝った。また、漁期には飛び魚が獲れるごとに二尾ずつエビスに供えた。不漁の時にも船中ごとにエビスに祈った。

(㍷) 栗生のエビス神

屋久島の代表的漁業集落。鰹漁で賑い、飛び魚漁でも栄えた。漁業に従事する家多し。栗生神社がある。真宗も日蓮宗もある。

(1) 種類と神体

④ 栗生川の河口よりやや上流の右岸の木叢の中に祀られているもので、特に通称はないが、これが栗生部落の代表的なエビスである。かつては木像であったが白蟻に食われたので、熊本県牛深の人に石で彫ってもらい、こちらの神官に魂を入れてもらって現在祀っているという。

③右の④エビスよりやや下流にザコエビスと呼ばれる小さな石塔があつたが（少なくとも明治末ごろにはあつたという）、現在では明らかでない。

○ 海岸の小高い砂丘の上に石祠があり、中に瀬戸物製の魚を抱いた老翁の立像（エビスの姿ではない）と楕円形の自然石、錆びた刀が納められており、「漁の神様」とか「浜の神様」と呼ばれている。かつては木彫の稚児姿のもので安徳天皇を祀っていたのだというが（因みに、栗生神社には二位の尼が合祀されていてこの辺には平家伝説が多い）、確認はできなかった。

(2) 祀り方

○ 八十八夜の浦祭りの時に、青年たちが④エビスに供え物をしに行き拝んだ。この頃は飛び魚漁開始の頃だが、終了時には青年たちが神官と共にエビスの前へ行つて祝詞をあげてもらつて拝み、飲食を共にした。また、飛び魚を獲つて帰ると、毎朝、船の上から④エビス目がけて投げ供えたり、エビスの近くの川へ張り出している木の枝に船の上から二尾ずつ吊り下げて通つたという。不漁の時には祠から④エビスを出して水で洗い、豊漁を祈るといふ。

○ 旧暦一月十五日には「漁の神」（浜の神）の前で祭りをするが、この時老婆がタオルなどを持って魚を招くような踊りをしたという。この時、主催者である青年は④エビスにも拝みに行く。

○ 鰹漁の盛んな頃、鰹船が④エビスの前を通る時には、必ずエビスに向かって海中（川中）にお神酒を注ぎ拝んで通つた。

六、エビス神信仰の特徴

次に(1)名称、(2)神体、(3)祀る場所、(4)祀り方、(5)その他、に分けて、屋久島におけるエビス神信仰の特徴をまとめたいと思う。

(1)名称 大きく漁のエビスと村(町)エビスに分けられるが、前者の場合祀っている場所の地名をとって呼ぶものと、関係する魚の名をつけて呼ぶもの、名称らしいもののないものとに分けられる。

そのうち、鰹のエビス、ザコ(キビナゴ)エビス、飛び魚エビス等と魚の名を冠しているエビスのあることは注目すべきであろう。鰹漁の盛んな時には鰹のエビスとか鰹の餌になるザコ(キビナゴ)のためエビスを祀って豊漁ならんことを願うが、鰹漁の衰退とともにそれをほとんど放棄したようにして(例えば、原、尾之間、栗生などのザコエビス、麦生、湯泊などの鰹エビス)、次に盛んになる飛び魚漁のために新たに飛び魚エビスを祀り始めるというのは、エビス神に対してその浦の漁全体よりももう少し狭くある限定した働きしか期待していない表われではないかと思う。⁽²⁷⁾

甕島から一湊部落へやってきていた漁師達もそうであったが、甕島では毎年マグロ網(または大敷網)の漁の口明けにあたって海中から石を拾い求めてエビスの神体として祀り、漁期終了と共に自然に放棄して翌年新たに神体を求めるのは、⁽²⁸⁾エビス神に一定期間のある種の網にだけ加護を求めようとする

るものであろうが、屋久島において漁の変遷に応じてエビス神を祀り代えるというのも、エビスに機能別の神慮を期待しようとする考えがあるからであらう。すなわち屋久島においては、エビス神を漁一般に幸いをもたらしてくれるから祀ろうとする意識のある一方で、ある限定された目的のためにしか祀ろうとしない意識もあるのだといえよう。

一湊、楠川、楠川、尾之間、小島には村(町)エビスがあり、漁師のみではなく部落全体の管理下に置かれている。漁エビスとの発生上の関係については不明であるが、漁エビスのように単なる職業神としてではなくて、部落神に上昇せんとするエビス神が五部落(かつてあったという麦生のを入れれば六部落)にもあることは、興味深いことである。屋久島の部落単位の行事としては、最高峰宮之浦岳を中心として部落後背の高岳に登る岳参りや二十三夜の月待の行事が盛んであるが、これらと村(町)エビス神との関係が密であることから、単なる職業神以上に上昇しようとするエビス神の姿をみてとれよう。⁽³⁰⁾

(2) 神体 エビス神のご神体約六十のうち(伝承上のものも含める)圧倒的多数を占めるのは、烏帽子をかぶって魚を抱えている木像または石像のもので(磨滅しているものも、おおよその形からそのように推定できる)、これは全国的に多いごく一般的な福神としてのエビス像に酷似しているものである。しかも大黒像と並祀されているものが少なくない。誰がこのような像を彫刻したか明らかにしているものは、家大工(一湊)、船大工(志戸子)、一般の人(吉田、安房、原)、知識人(麦生)、天草牛深の人(小島、

栗生）等々で、そのほとんどは島内の人であり、屋久島の中にはすでに早くからエビス神の姿について、中央で一般に抱かれているものと同じイメージが定着していたものと思われる。これがどこからもたらされた神像観かは不明であるが、牛深の人に彫刻してもらったという例のあるのは、それを考える手がかりになるかも知れない。

一方、意外に少ないのは自然石をご神体とするものである。全部で六例であるが、一湊のは甕島から来ていた漁師が祀っていたものであり、榑川のは近年僧侶が経文を記して祀ったもの、小瀬田のも一体は臨時的に祀っているもの、原のはすでに現存しないものである。となれば、現在自然石を主たるご神体としているものは皆無と言っても過言ではない。近くの種子島(31)や黒島・硫黄島・竹島(32)の例と比較して非常に少ない数と言える。これは、先にも述べた通り、つとに桜田氏が注目して以来南九州を中心とする地のエビス神祭りの特徴として知られているところの、漁開始にあたって、両親の揃っている健康で評判のよい若者に目隠しをさせて、海中に潜らせ若者の手に触れた石を持って来させてエビスの神体として祀る風が、種子島や黒島・硫黄島・竹島等においては多いのに対して、屋久島では皆無であることと対応している。その理由をただちに明確にすることはできないが、とにかく現在のご神体を見る限り、屋久島のエビス神はその形態といい大黒と並祀されているものの少なくないことといい、素朴な漁神としてよりも福神イメージの強いものであることが指摘できよう。

(3) 祀る場所 漁エビスは港の入口、村（町）エビスは部落中央というのがほとんどである。築港以

前の屋久島の港の多くは大小の河口を使用していたので、今でも河口の兩岸に祀られていることが多い。エビス神に豊漁と漁船の安全を祈る以上当然のことと思われる。

(4) 祭り方 祭日に全島共通のものはない。各部落には浦祭りといって、皆が出て豊漁と浜の安全を祈願する祭りがあるが、その時には必ず浜に祀られているエビスに参拝することになり、結果的には大なり小なりエビス祭りの形をとるものが多い。一部落で何度も行なう所があるが、それらをすべて月日別にみると左の通りである。

一月十日（尾之間）、一月十五日（楠川、栗生）、一月二十三日（楠川）、二月十五日（一湊）、三月十日（永田、吉田）、四月三日（麦生、原）、四月八日（尾之間、平内、湯泊）、四月十日ごろ（安房）、四月十一日（宮之浦）、四月十五日（楠川）、八十八夜（小瀬田、湯泊、中間、栗生）、五月五日（宮之浦）、五月十日（小瀬田）、五月二十三日（楠川）、六月三日（一湊）、六月六日（志戸子）、六月八日（楠川）、六月十六日（原）、九月二十三日（楠川）、十月十五日（楠川）

この中には十日というのが多いが、さらにそのほか、主として船主、網主、船頭が中心になり十日エビスといつて一月十日にエビス神を祝っている所がある。志戸子、楠川、小瀬田、麦生、原、尾之間等である。この日は十日エビスという言葉とともに兵庫県の西宮神社に関係深い祭日であり、広く西日本に特徴的な祭日である。⁽³³⁾ 屋久島の漁のエビス神の祭日には、かなり中央からの影響の濃いことがわかる。

右の固定した祭日のほか、先に漁の祝祭のところで述べたように一月二日の船祝い、漁開始期と終了時の祝い、初漁や豊漁・不漁の時など、何かにつけてエビス神を拝むし、平素でも祠の前を通りかかると手を叩いて拝礼する。船の上でも、「エビスアマ!」といってエビスに祈るという。

祀り方については、日の固定した浦祭りの時以外は専門の神官に頼むことはなく、部落の人々で共同して祀っている。特に頭屋等を決めることはなく、主として船主が独自で神酒、米、塩、魚等々を供えて拝み、船中の人もお参りに行くというものである。また、一湊や麦生のように木像エビス神に赤・青色などで化粧させるのは（他の部落のでも木像のものはかつては着色してあったようだ）、祭りに際してエビス神を再生させようという気持の表われかと思われるが、鹿児島県に多い田の神に化粧させることとの関連をうかがわせる。⁽³⁴⁾

(5)その他 エビス神に漂着神的要素の多いことは全国一般の例であるが、屋久島においても吉田、志戸子、宮之浦、梶川等では、エビス神が漂着したとか海中から引き上げたという伝承がある。

エビス神のご神体が盗まれること、または盗まれるのもやむをえない位に考えている例は多い。これも南九州をはじめ一般によくあることで、大隅半島の内之浦のように盗まれてエビスは旅することを喜ぶといっている例などから考えて、盗まれて行くことに神の巡遊する姿をだぶらせているのではないかと思われる。⁽³⁵⁾

水死体をエビスとする例は吉田部落にわずかにみとめられるだけで、全島ほとんどこの伝承はない。

不具とするものも、吉田と志戸子部落にわずかにあるだけである。

以上のことを総合して

○ 屋久島の漁の神は、ほとんどエビス神一色になっていること。⁽³⁶⁾

○ 一部落に一体ではなく、二種類以上祀っている所がほとんどで、エビス神が機能別に次々と新たに祀られる傾向のあること。

○ 漁エビスという職業神としてのもの以外に、村(町)エビスという部落神的性格のエビスの多いこと。

○ エビス神に、烏帽子をかぶり魚を抱いた全国一般の福神的イメージを持っているらしいこと。
したがって、南九州に多い目隠しした青年が潜って拾った自然石をエビスとして祀ることの少ないこと。また、十日エビスなどといって祭日も中央の影響を受けていること。

○ しかし、島外の宗教者や、エビスを祀る神社との直接の交渉は現在では指摘できないこと。

○ エビス神の像に化粧して祀ること。

○ 豊漁の続く所のエビスのご神体がよく盗まれること。

○ 不具神の伝承が稀薄なこと。

○ 水死体をエビスとする伝承のほとんどないこと。

などが指摘できるのである。

この稿を成すにあたり、次の方々のお世話になった。記して感謝の意を表します。

永田―大山シオ氏（明22生）、牧繁蔵氏（明31生） 吉田―日高森之助氏（明33生）、日高藤兵衛氏（明35生）、近間正見氏（大14生） 一湊―寺田民次氏（明35生）、真辺時雄氏（明37生）、高橋蓮雄氏 志戸子―竹之内徳清氏（明37生）、早崎文雄氏（大9生）、竹之内留義氏（大9生） 宮之浦―松田義信氏（大2生）、益救神社宮司吉元氏 楠川―河野胤重氏、牧盛雄氏（大4生）、牧弘美氏（昭13生） 楠川―輦次作氏（明27生）、輦新蔵氏（大1生） 小瀬田―早崎淳氏 安房―川東義信氏（大5生）、岩川学氏 麦生―大山友助氏（明25生）、郷純氏 原―安藤長右エ門氏（明29生） 尾之間―岩川正吉氏（明21生）、岩川勇夫氏（明44生） 小島―岩川武一氏（明29生）、岩川勇吉氏 平内―渡辺比賀次郎氏（明27生） 湯泊―岩川年松氏（明34生）、佐々木光秀氏（明43生） 中間―川崎某氏（明40生） 栗生―日高静雄氏（明27生）、岩川静志氏（明35生）、岡部実志氏（明31生）

註

- (1) エビスは漢字で恵比須、蛭子、夷、戎等と書かれるが、本稿では片仮名書きに統一した。
- (2) 喜田貞吉「夷三郎考」(喜田貞吉編著・山田堅理夫補編『福神』宝文館出版 昭和五十一年 所収)。
- (3) 長沼賢海『福神研究・恵比須と大黒』丙午出版社 大正十年 および、喜田貞吉編著・山田堅理夫

補編『福神』宝文館出版 昭和五十一年。

(4) 註(3)に同じ。

(5) 大阪市参事会編『大阪市史』第一巻 大正二年 四〇七、四〇九ページ。

(6) 拙稿「エビス信仰の伝播と神去来伝承の複雑化」(『信濃』三一—一 昭和五十四年 所収)。

(7) 桜田勝徳「漁村におけるエビス神の神体」(『漁撈の伝統』岩崎美術社 昭和四十三年 所収)。

(8) 亀山慶一「流れ仏考」(『日本民俗学』二—三 昭和三十年)。

(9) 宮本常一「エビス神」(『海に生きる人々』昭和三十九年)。

(10) 川崎晃稔「種子島のえびす神の神体」(『南島民俗』二十三号)。

(11) 波平恵美子「水死体をエビス神として祀る信仰…その意味と解釈」(『民族学研究』四二—四)

(12) 註(7)に同じ。

(13) 註(10)に同じ。

(14) 屋久町誌編纂委員会編『屋久町誌』昭和三十九年 また上屋久町の『町勢要覧』(昭和五十四年版)によれば、上屋久町には縄文遺跡が十三カ所、弥生遺跡が十四カ所発見されているという。

(15) 屋久町誌編纂委員会編『屋久町誌』昭和三十九年 なお天保十四年の序を持つ『三国名勝図会』(南日本出版文化協会発行 昭和四十一年)によると「島中仏寺は、皆法華宗のみにて、他宗なし、云々」という。

(16) 『鹿児島県宗教法人名簿』(県学事文書課 昭和五十年刊)による。

(17) 川崎晃稔「屋久島の鯉漁習俗」(『南島民俗』二十二号)、同「屋久島一湊の漁業習俗」(『南島民俗』三十二号) なお、鯉船にはどうしても一定数以上の乗り子が必要としたので、船主は船中に男の子が生まれるとその子が一人前になるまで、漁があるといつもミアワセといって半人前ほどを持って行きつけ、十五歳に達すると自分の船に乗ってもらうよう配慮したという。

(18) 註(17)に同じ。

- (19) 上屋久町編刊『上屋久町産業の展開構造』昭和三十八年 木原平四郎「屋久島町栗生」(『南島民俗』二十二号)。
- (20) 飛び魚は屋久島や隣島である種子島近海の魚であるらしく、手元の『鹿児島県水産要覧(昭和三十五年版)』(鹿児島県水産商工部)をみると、昭和三十四年一月から十二月までの鹿児島県内の魚市場取扱いい高をみると、飛び魚は屋久島と種子島の魚市場以外はどこも扱っていない。そのうち屋久島での扱い高が圧倒的に多いのである。
- (21) 屋久町誌編纂委員会編『屋久町誌』昭和三十九年 六十九ページ。
- (22) 上屋久町編刊『上屋久町産業の展開構造』昭和三十八年。
- (23) 川崎晃稔「屋久島一湊の漁業習俗」(『南島民俗』三十二号)。
- (24) 下野敏見氏によると、その時「岬観音崎島が舞う。それもトビウオや、やっとさまよ、見ておやれ、ア、べったい、べったい」と歌うという(鹿児島県教育委員会『鹿児島県民俗資料緊急調査報告書』昭和四十年)。
- (25) 板に書いたマンダラで、それには次のような由来がある。「昔、楠川の浦から出た船が、たびたび遭難したため、えらい人に占ってもらったところ、『浦の地形が、お日様に向かって鶴が羽をひろげたようになっている、その鶴が首をねじっている。故に悪いのだ。』とのことで日蓮の弟子(日典上人)を頼んで拝んでもらったところ、それ以後、災難はなくなった」。この時、お経として書いてもらったのが、「いたまんだら」で、現在もお寺にある(牧正人「屋久島の民俗」(『鹿児島県民俗』六一二)。
- (26) 宮本常一氏の『屋久島民俗誌』には、「小瀬田には……岬の岩の上や、人の住まぬ浦の岩の上にエビス様を祀る風がある。これらはただ丸い石である。鰹やトビ魚をとる仲間がそのあたりの石を勝手に持って来て祀ったもので、岩のやや窪んだ所へ白砂を敷き、その上に石を祀った。何浦のエビスドン、何岬のエビスドンというように言っていた。祭りとしてはオシオトリと言って、白砂をあげた。それはその

あたりでトビ魚のとれた時であった。また年に一回酒や御馳走をそなえて祭をした。」という興味ある事例が載っているが、私は残念ながら確認しえなかった。

(27) 同様の例として、竹島にも鯉漁と飛び魚漁の二つのエビス神が祀られているという。川崎晃稔「三島村漁業習俗調査」(『南島民俗』二十七号) 参照。

(28) 註(7)に同じ。また註(10)(27)のほか、高橋文太郎「大隅郡内之浦採訪記」(『民俗学』五一六)などにも類似的報告例がある。

(29) 岳参りについては、石飛一吉「大隅諸島における山岳信仰からみた景観の構造——信仰圏の理解を通して——」(『民俗学評論』十七号) などがある。

(30) 『三國名勝図会』の益救神社の項に「田石二ツ有て神跡とす、隅州神社考、本府大磯蛭児宮の条に、屋久島の神社は蛭児を祭り、益救神社と号すと云へり」とあるのは、屋久町最大の益救神社が、あるいはかつてはエビス神を祀ることから始まったかと思わせるものである。ただこの蛭児とは、現在の宮之浦の水尻屋のエビスを指すかとも考えられる。

(31) 註(10)に同じ。

(32) 川崎晃稔「三島村漁業習俗調査」(『南島民俗』二十七号)。

(33) 吉井貞俊「エビス神信仰の研究——エビス神を祀る神社の問題——」(『国学院大学日本文化研究所紀要』二十四) 昭和四十四年。

(34) 寺師三千夫『薩摩のタノカンサア』鹿兒島放送文化研究会 昭和四十二年。

(35) 高橋文太郎「大隅郡内之浦採訪記」(『民俗学』五一六)。

(36) 麦生や原のように、「リユウゴサマ(竜王様?)」を、栗生のように「漁の神」をエビス神と共に祀っている所も、わずかながらある。